

湖南の秋

四回生

永山 友子

秋も深まつた十一月二十二日、私達三回生は、安田章生先生と共に、湖南の文学散歩に出かけた。まず、芭蕉が俳文『幻住庵記』を成した幻住庵へ向かうのだが、道がはつきりわからず、何度か道の辺の人に聞いてみる。親切に教えて下さる人々の姿を見ていると、ふと「行く春を近江の人とおしめけり」の句が思い出される。

幻住庵のある近江尾神社の二つめの鳥居は国分山への登り口にあり、それをくぐると急な山道、「翠微に登る事三曲二百歩」で境内に至るのであるが、赤く色づいた紅葉にかこまれ、かさかさとした落葉を踏みしめ歩いていくと、あたりの静寂が、心の中で大きくなつていくように感じられた。誰もいない境内が急に賑やかになる。旧社の

南、小高い所に再建された庵室である。ところが、管理が十分でないせいか、何だか趣がない。幻住庵址の石柱と椎の木の本根にある「先たのむ椎の木も有夏木立」の句碑の冷たい沈黙の中に、芭蕉の世界を見たような気がした。

昼食をとり、石山寺へと向かう。工事中の道路から横道に入ると、すすきの穂が道の両端で揺れており、家々の庭には沢山実をつけた柿の木やみかんの木が見られる。それぞれにお喋りしながら三十分ほど歩くと門前に着いた。見事に紅葉した木々の下の石畳をぶらぶらと歩いていると、『源氏物語』や『蜻蛉日記』の作者達はどのような姿で、どのような思いでこの道を通つたのだろうか、遠い遠い歴史の中に吸込まれていくようだった。

石段を登ると石山の名を生ぜしめた大岩が、累々と重なり聳えている。本堂は懸崖にさしかけて建てられており、その高欄から心ゆくまで石山の秋を味わった。内陣に入りいろいろと説

明を聞き、本尊や「源氏の間」などを見学したのち、電車で膳所まで行き、そこから歩いて五分ばかりの義仲寺へ向つた。

小さな山門をくぐるとこじんまりとした庭があり、私達三十人程の者が入ると一杯になつてしまつた。左手に義仲と芭蕉のお墓が二つ並んであり、所狭しと多くの句碑が建っている。その中には、「旅に病で夢は枯野をかけ廻る」「古池や蛙飛こむ水の音」の句が見られる。だが翁堂の芭蕉翁陶像は、修理中で残念ながら見る事が出来なかつた。しばらくの間、庭のあちこちに腰かけて、今日最後の一時をそれぞれに楽しむ。

門を出て振返つてみると、芭蕉のあの大きな葉が、青く澄み切つた秋の空の中で心地よさそうに風にゆれていた。

国文学を学ぶことの喜びを、心と体で味わつた素晴らしい秋の一日だった。